

三

安来市黒井田町

長曾土壙墓群

1981年3月

安来市教育委員会

はじめに

私達が住む安来市は、島根県東端部に位置し、先人が築いた文化遺産を数多く保有している。しかし高度経済成長に伴い地域開発が進むにつれ、貴重な埋蔵文化財が破壊されてきた。

黒井田町地内には、浦ヶ部遺跡、大日さん古墳、宮の山古墳等多く遺跡の包蔵地がある。この地域も近年急激な地域開発が進み、早急に埋蔵文化財の調査を実施する必要にせまられている。今回は長曾遺跡群の一部、土塙墓群の実態調査を行い、古代人の生活、文化の解明に役立てることができた。

発掘調査にあたっては、土地所有者の深い理解と関係者各位のご協力により、本調査が実施できたことに対し、厚くお礼申し上げる次第であります。

今後は、この調査を契機に祖先が残した貴重な文化の華を愛護する精神を市民の中に芽生えてくれることを願うものである。

昭和 56 年 3 月

安来市教育委員会



例　　言

1. この報告書は安来市教育委員会が昭和56年3月4日から3月31日にかけて実施した安来市黒井田町地内の長曾土壤墓群の発掘調査報告である。
2. この報告書の作成は、赤沢秀則、広江奈智雄、吉田里子、石原阜、石原静枝、広江真理子の協力を得て、永見英が執筆、編集した。
3. この報告書に使用した方位は磁北である。
4. この遺跡の測量については、石井悠（県教委）、広江奈智雄（安来市教委）、秦千隆の協力を得て実施した。

（敬称略）

安来市長曾土壤墓群調査関係者一覧

調査主体者	安来市教育委員会
調査指導	石井 悠（鳥根県教育委員会文化課）
調査員	永見 英（安来市教育委員会嘱託）
地元協力	青戸千代子、青戸トメ、青戸弘秋、青戸皆代、青戸保子、青戸安子、岩田美智子、岩田益子、岩田ヤヨエ、岩田勝己、秦千隆（関西大学学生）、大谷晃二・原裕司・中島剛史・野坂敏之・川中聰（安来高校歴史研究会）
事務局	安来市教育委員会社会教育課課長 山根勇一
協力	青戸 真

（敬称略）

目 次

I 章 調査の経過	1
1. 調査に至る経過	1
2. 調査の概要	1
II 章 位置と環境	3
III 章 遺跡の調査	3
1. 調査の概要	3
2. 遺構について	7
(ア) 東側土墳墓群	7
(イ) 中央土墳墓群	12
(ウ) 西側土墳墓群	14
IV 章 出土遺物	17
V 章 まとめ	19

插 図 目 次

図 1 長曾土墳墓群と周辺土墳墓	2
図 2 長曾土墳墓群と周辺遺跡	4
図 3 長曾土墳墓群地形測量図	5
図 4 遺構配置図	6
図 5 第1号土墳墓出土土器	7
図 6 第2号土墳墓	7
図 7 第5号土墳墓・出土土器	8
図 8 第6号土墳墓・出土土器・砾石	9
図 9 第13号土墳墓	11
図10 中央土墳墓群とイ、ロ溝状遺構・出土土器	12
図11 第19号土墳墓	13
図12 第19号土墳墓・出土土器・砾石	14
図13 西側土墳墓群	15
図14 第24号土墳墓	15
図15 第24号土墳墓出土土器	16

図 版 目 次

図版 1. 遠景（調査前） 近景（調査前）	
図版 2. 近景（調査後）東側土墳墓群・中央土墳墓群	
図版 3. 近景（調査後）西側土墳墓群	
図版 4. 第5号土墳墓土層断面図 第23号土墳墓土層断面図	
図版 5. 第24号土墳墓土層断面図 イ溝状遺構	
図版 6. 列石状遺構 1 列石状遺構 2	
図版 7. 第2号、第3号土墳墓検出状況 第3号土墳墓	
図版 8. 第2号土墳墓 第13号土墳墓	
図版 9. 第6号土墳墓遺物出土状況 第19号土墳墓土器出土状況 イ溝状遺構土器出土状況 ロ溝状遺構土器出土状況	
図版10. 出土遺物	
図版11. 出土遺物	
図版12. 出土遺物	

I 章 調査の経過

1 調査に至る経過

近年黒井田町長曾遺跡周辺では開発が激増し、早晚に破壊される恐れがありこのため早急に発掘調査を実施して遺構の範囲及び残存状況を確認するとともに今後の遺跡保護に資するべく国庫補助を得て実施したものである。

発掘調査に先立ち、遺跡の踏査を実施した結果丘陵（松林）には古墳2基の所在を確認することができ、同丘陵の松は松くい虫に侵食されており伐採の準備がなされていた。

なお、発掘調査準備中に丘陵の松は全部伐採されたため調査に関しては助力となるものであった。

2 調査の経過

調査は、昭和56年3月4日より開始し、南北を主軸に5mグリッドを設定した。調査を開始した翌日から、100Eグリッドより、土壙墓に伴うような時期の土器片が出土した。また土壙墓が100Fグリッドより検出された。これを端緒に発掘終了時には、明確なもので、26基の土壙墓が検出された。土壙墓は、昭和37年頃内田才氏等の分布調査により、丘陵上に散布する土器片が注目され、「安来平野における土壙墓」（昭和41年）により明らかにされるに至った。しかし安来市では、昭和42年、中山遺跡が調査されて以来、四隅突出型方形墳墓の調査は実施されたものの、土壙墓の調査はなされなかった。今回の調査で多数の土壙墓が検出され、多くの貴重な資料を得ることができた。

同年3月31日に埋戻しが終了し調査を終えた。



作業風景



番号	名 称	番号	名 称
1	長曾	11	日本台
2	九重	12	土壤墓群
3	桑原	13	常福寺山
4	崎中山	14	藤原谷
5	清水山	15	堂面
6	健尾	16	西山辺
7	宗見寺山	17	切川神社
8	羽根戸山	18	切川
9	地福寺	K	土壤墓群
10	築山	F	社日山
			前期古墳群(造山古墳等)
			四隅突出型方形墳墓群

図 1 長曾 土壇墓群と周辺土壇墓

Ⅱ章 位置と環境

長曾土墳墓群は安来駅から国道9号線を東へ約0.6kmの所の南方約0.15kmの低丘陵頂部平坦面の安来市黒井田町1896-4番地に所在する。

安来市は市街地に川尻・今津・川津という地名が所在することから窺えるとおり、中国山地より中海に注ぐ飯梨川・伯太川が形成した沖積平野である。

今回調査された様な土墳墓の分布は、飯梨川東側を中心に分布している。飯梨川西岸については、分布調査の不足もあるが、仲仙寺・宮山四隅突出型方形埴墓、造山1・3号墳・大成古墳等の前期古墳が所在する地域である。

長曾土墳墓群周辺では、安来で唯一の縄文時代後・晩期の土器が出土する神田遺跡を除くと、弥生時代後期からの遺物が多いと考えられる。そして、同土墳墓群の丘陵裾部は、米垣・朝烟遺跡が所在し、同土墳墓群に関連する集落遺跡と考えられる。また、長曾土墳墓群の両側には古墳が所在する。丘陵先端の古墳は15×10mの変形が著しいが、方墳と考えられる。盛土を有するものである。東側に所在する古墳は、菱形が著しく、墳形は分らないが、丘陵を利用して造られたものと考えられる。周辺には古墳時代中・後期の石棺を主体とする古墳が分布しているが、前期古墳は明確になっていない。

Ⅲ章 遺跡の調査

1 調査の概要

調査は2つの古墳の間のわずかの傾斜を有する平坦面のほぼ中心に南北を主軸に調査区を設定して実施した。レベルは任意に基準を設定した。遺跡の標高は約22~19mの間である。

土墳墓は明確なもので26基が確認された。地区的には3つの縦まりに分れる。第一は東側の台状に加工された平坦面に位置する土墳墓群と、その周辺に位置する土墳墓群。しかしこの縦まりは少なくとも3つに分かれるものと考えられる。第二の縦まりは台状に加工されている裾部に點られている石列を部分的に壊している溝状遺構（以下イ溝内遺構とする）と、それにはば直行する溝状遺構（以下ロ溝状遺構とする）の2つの溝状遺構に向されている3基の調査区の中央に位置する土墳墓群である。第三の縦まりは西側の3基の土墳墓群である。

出土遺物は、供献された土器である。第1号・第5号・第6号・第19号・第24号土墳墓から出土している。また、イ・ロ溝状遺構からも出土している。



- | | | |
|-----------|------------|-------------|
| 1. 長曾土壙墓群 | 7. 和田横穴 | 13. 大日さん五輪塔 |
| 2. 刈畠古墳群 | 8. 宮の山古墳 | 14. 小浜古墳 |
| 3. 刈畠遺跡 | 9. 長曾遺跡 | 15. 大納言山遺跡 |
| 4. 米垣遺跡 | 10. 米垣山横穴 | 16. 高袋遺跡 |
| 5. 高庄遺跡 | 11. 黒鳥横穴 | |
| 6. 捕ヶ部遺跡 | 12. 大日さん古墳 | |

図 2 長曾 土壙墓群と周辺遺跡

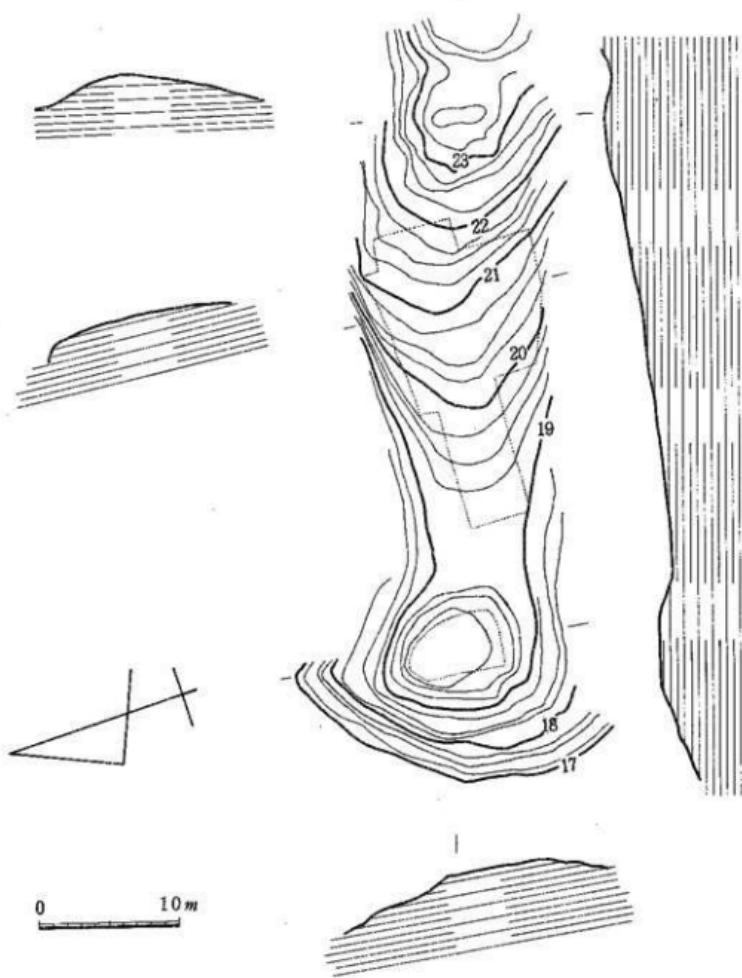


図 3 長曾 土塁墓群地形測量図

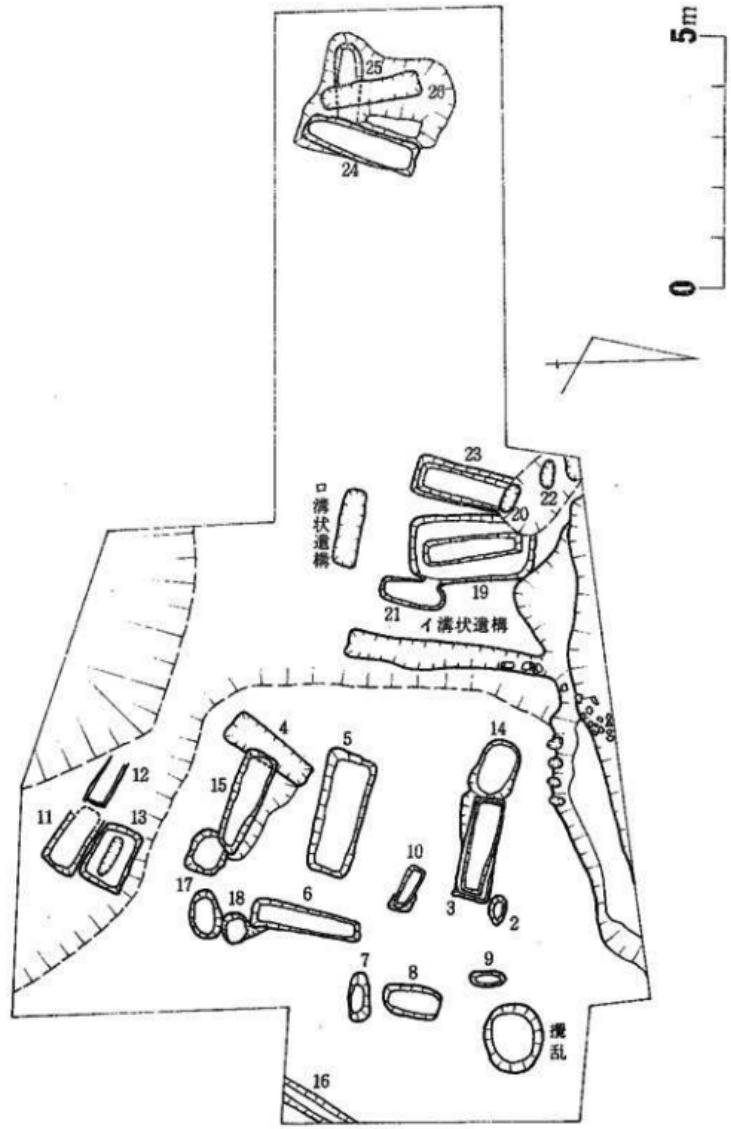


図4 遺構配置図

2 遺構について

遺構は3つの種まり別に以下記す。

(ア) 東側土壤墓群

第1号土壤墓

第1号土壤墓の規模は長辺約75cm、短辺約56cm、深さ約28cmを測る。方位はN-68°-Wである。平面形は開丸長方形、断面形はU状を呈す。この土壤墓は側壁を朱で塗られていた。第15号土壤墓はその側壁を切られていることからこの1号より古いものである。遺物は上層の黒褐色土層から高坏の坏部片が出土した。

第2号土壤墓(図6)

第2号土壤墓の規模は長辺約90cm、短辺約34cm、深さ約52cmを測る。方位はN-79°-Wである。平面形は梢円形に近い開丸長方形、断面形は日状を呈す。土層は三層に分かれ、いずれも砂質土層である。底面は平坦である。遺物は検出出来なかった。

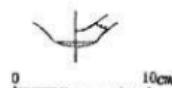
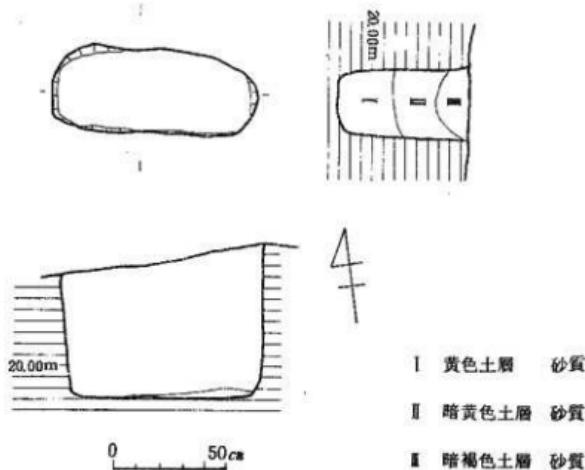


図5 第1号土壤墓
出土土器



第3号土壤墓

図6 第2号土壤墓

第3号土壤墓は木棺墓である。掘方の長辺約213cm、木棺部長辺約192cm、西側端部約52cm、東側端部約40cmを測る。掘方位はN-83°-W、木棺部方位はN-78°-Wである。平面形は整った矩形、断面形は二段掘を呈す。底面は水平で平坦である。遺物は検出出来なかった。

第4号土壙墓

第4号土壙墓の規模は長辺約173cm、南西端部約90cm、北東端部約50cm、深さ約45cmを測る。方位はS-42°-Wである。平面形は隅丸矩形、断面形はU状を呈す。南西端は北東端より低い。稚拙で雑な作りである。遺物は検出出来なかった。

第5号土壙墓(図7)

第5号土壙墓は木棺墓である。規模は長辺約234cm、西側端部約94cm、東側端部約60cm、深さ約55cmを測る。方位はN-77°-Wである。平面形は整った隅丸矩形、断面形はU状を呈す。層位は6層に分かれる。埋土は地山ブロックを多く含む。底部は西側端部が若干高くなっている。遺物は墓壙の中央上面より供献されたと考えられる鼓形器台脚部が出土した。

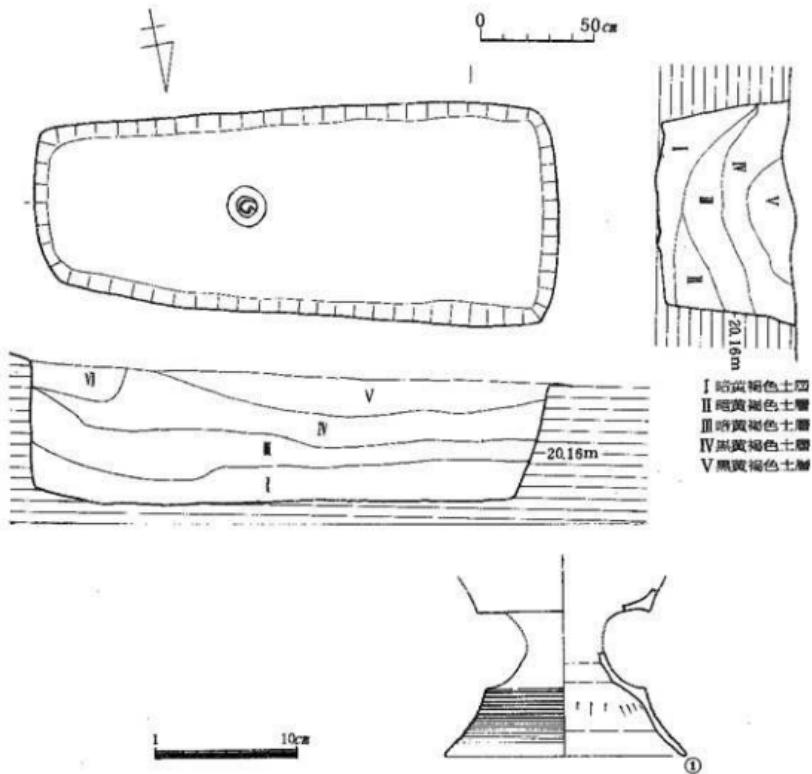


図7 第5号土壙墓・出土土器

第6号土塙墓(図8)

第6号土塙墓は木棺墓である。長軸は約220cm、南側端部約60cm、北側端部約47cm、深さ約40cmを測る。方位はS-15°-Wである。平面形は堅った矩形、断面形は二段階を呈す。底面は北側端部が低くなっている。土層は7層に分かれる。下層は地山ブロックを多く含む。上層の暗黄色土層より、土壇には直行して鼓形器台と、器台の受け部に注口土器が乗って横転した状態で出土した。注口土器は底部を欠損していた。また、土器の北側約20cmのところで削痕のある置石が出土した。

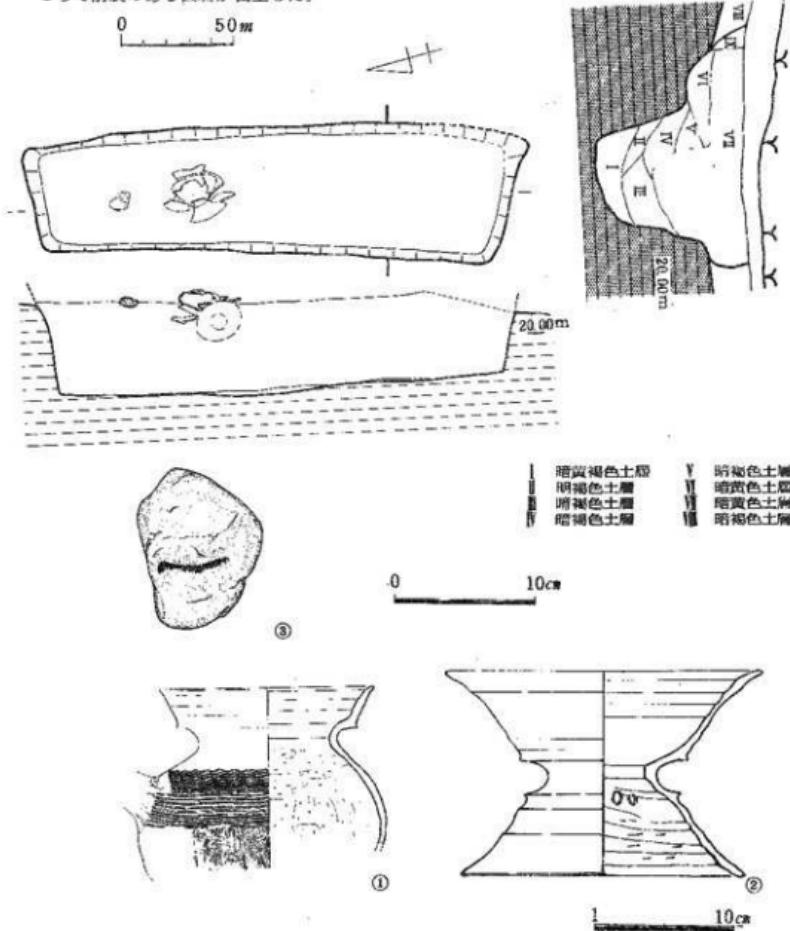


図8 第6号土塙墓・出土土器・置石

第7号土壙墓

第7号土壙墓の規模は長辺約100cm、短辺約46cm、深さ約40cmを測る。方位はS-82°-Wである。平面形は梢円形に近い隅丸長方形、断面形はU状を呈す。底面は東側が低くなっている。遺物は検出出来なかった。

第8号土壙墓

第8号土壙墓は木棺墓と考えられる。規模は長辺約124cm、短辺約50~60cm、深さ約55cmを測る。方位はN-15°-Eである。平面形は胸部の張った隅丸長方形、断面形はU状を呈す。底面はほぼ水平である。遺物は検出出来なかった。

第9号土壙墓

第9号土壙墓の規模は長辺約73cm、短辺約36cm、深さ約46cmを測る。方位はN-9.5°-Eである。平面形は隅丸長方形、断面形は南側が浅い二段掘を呈す。土層は二層に分かれる。底面は若干北側が低い。遺物は検出出来なかった。

第10号土壙墓

第10号土壙墓の規模は長辺約80cm、西側端部約25cm、東側端部約22cm、深さ約25cmを測る。平面形は整った矩形、断面形は東側のみ浅い二段掘を呈す。側壁はほぼ垂直である。層位は二層に分かれる。底面はほぼ水平である。遺物は検出出来なかった。

第11号土壙墓

第11号土壙墓は木棺墓と考えられる。規模は長辺約128cm、東側端部約50cm、西側端部約40cm、深さ約28cmを測る。方位はS-69°-Eである。平面形は整った隅丸矩形、断面形はU状を呈すものの側壁は垂直とはいえない。層位は一層である。底面はほぼ水平である。遺物は検出出来なかった。

第12号土壙墓

第12号土壙墓は組合せ式の木棺墓と考えられる。規模は長辺約160cm、東側端部約60cm、西側端部約45cm、深さ約60cmを測る。方位はS-69°-Eである。断面形はU状を呈する。底面はほぼ水平である。遺物は検出出来なかった。

第13号土壙墓(図9)

第13号土壙墓は木棺墓である。掘方の規模は長辺約125cm、短辺約74cm、深さ約60cm、木棺部長辺約85cm、短辺約28cm、深さ約20cmを測る。方位はS-67.5°-Eである。平面形は整った長方形、断面形は二段掘を呈す。層位は底面に粘土層があり、その上が砂層である。底面は水平である。遺物は検出出来なかった。

第14号土壙墓

第14号土壙墓の規模は長辺約100cm、短辺約70cm、深さ約30cmを測る。方位はS-77°-Wである。平面形はU状を呈する。側壁は垂直とはいえない。土層は地山ブロックを含む砂層で、三層に分かれる。底面はほぼ水平である。遺物は検出出来なかった。

第15号土壙墓

第15号土壙墓は木棺墓である。棺部の規模は長辺約215cm、西側端部約63cm、東側端部約25cm、深さ約45cmを測る。方位はN-65°-Wである。平面形は全体を明確にすることが出来なかったが、掘方は隅丸長方形、木棺部は東西両端部が円形を呈する。棺の壁がややわん曲する。土層は二層に分かれる。底面は平坦である。遺物は検出出来なかった。

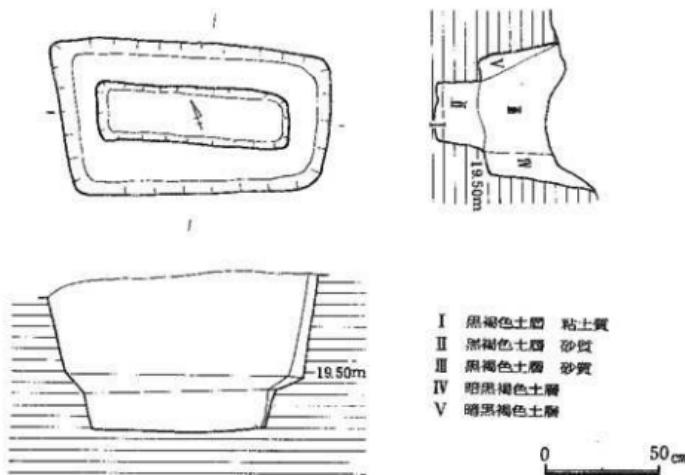


図9 第15号土壙墓

第16号土壙墓

第16号土壙墓は木棺墓と考えられる。全体を調査していないため明確ではなかったが規模は短辺約50cm、深さ約40cmを測る。方位はN-36°-Eである。平面形は長方形、断面形はU状を呈す。層位は地山ブロックを含む3層に分かれる。底面は平坦であり北側がやや低くなっている。遺物は検出出来なかった。

第17号土壙墓

第17号土壙墓の規模は長辺約100cm、短辺約55cm、深さ約40cmを測る。方位はN-90°-Wである。平面形は梢円形に近い隅丸長方形、断面形はU状を呈す。層位は二層に分かれる。底面は水平である。遺物は検出出来なかった。

第18号土壙墓

第18号土壙墓は長辺約62cm、短辺約40cm、深さ約54cmを測る。方位はN-80°-Eである。平面形は隅丸長方形、断面形はU状を呈す。底面は水平である。遺物は検出出来なかった。

(イ) 中央土壙墓群 (図10)

第18・21・23号土壙米はイ・ロ溝状遺構に画されている。イ溝状遺構は長辺約330cm、短辺約60cm、深さ10cmを測る。方位はN-83°-Eである。層位は一層で暗黄褐色を呈す。ここからは鼓形器台と低脚环が出土している。卷台は浮いた状態であった。ほぼ完形で脚台部が下になっていた。約175cm離れた所に低脚环が脚を底面に接して出土した。ロ溝状遺構は長辺約152cm、短辺約40cm、深さ約12cmを測る。方位はN-82°-Wである。

低脚环が出土している。低脚环は口縁部が溝の底部に横転した状態で出土した。

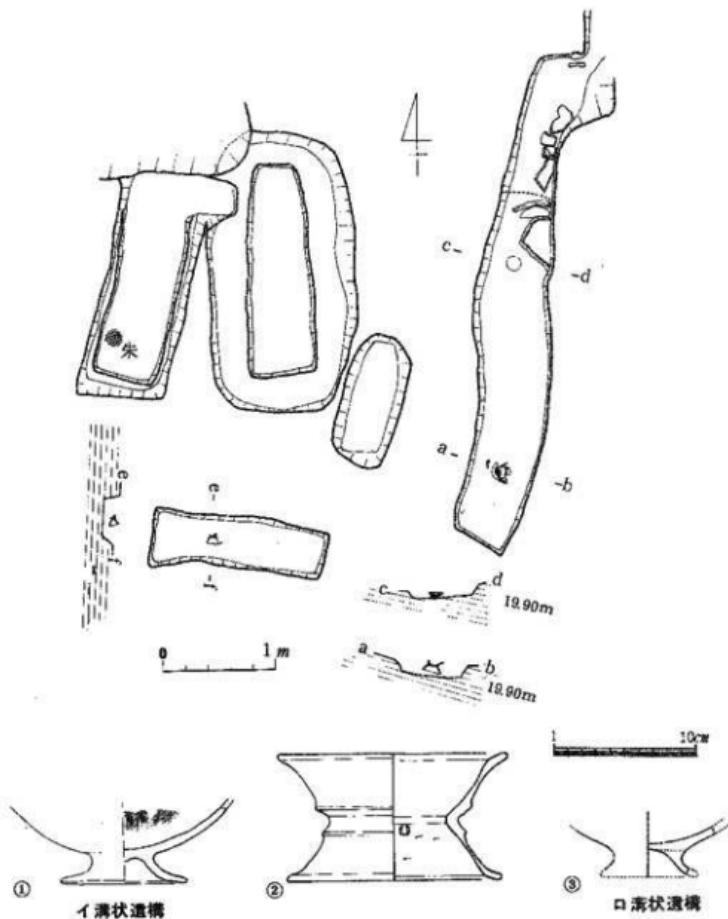


図10 中央土壙墓群とイ・ロ溝状遺構・出土土器

第19号土塚墓（図11）

第19号土塚墓は木棺墓である。掘方の規模は長辺約250cm、短辺約140cm、深さ約72cm。木棺部は長辺約180cm、南側端部約50cm、北側端部約40cm、深さ約38cmを測る。方位はN-3°-Wである。平面形については、掘方は整った胸郭の張った椭丸長方形、木棺部は整った矩形、断面形は二段掘を呈す。木棺内の土層は砂質である。南側が北側より低くなっている。蓋板上層より供獻用と考えられる鼓形器台2箇体分の破片・甕1箇体・砾石・その他割石が出土した。甕の上に器台・石が壊されて置かれた。また、周辺に破片が散らばった状態で出土した。

I	黄褐色土層 砂質	V	暗褐色土層
II	暗黃褐色土層 砂質	VI	暗黃褐色土層
III	暗黃褐色土層	VII	暗黃褐色土層
IV	暗黃褐色土層	VIII	暗黃褐色土層

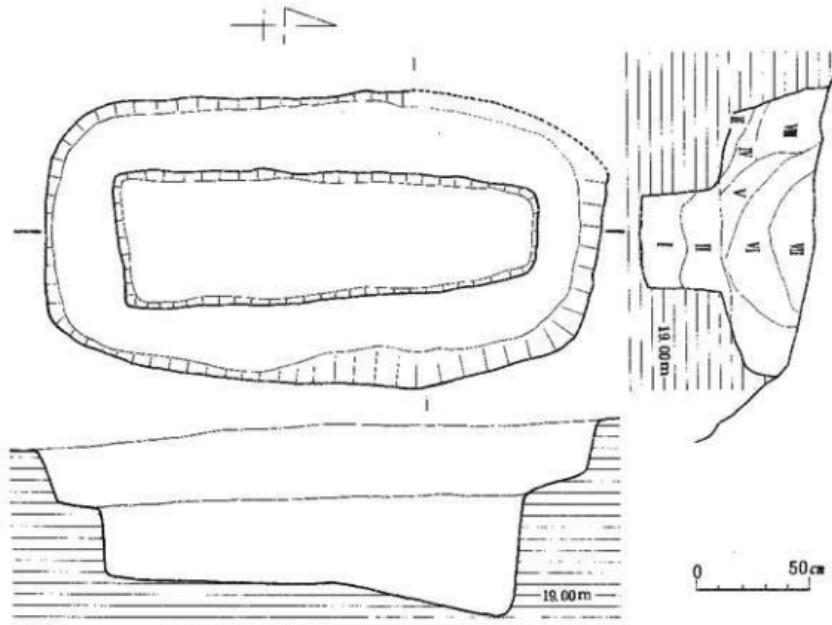


図 11 第19号土塚墓

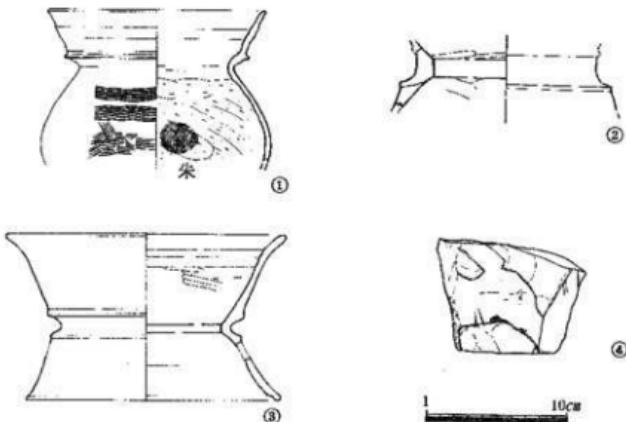


図12 第19号土壙墓・出土土器・磁石

第20号土壙墓

第20号土壙墓の規模は長辺約80cm、短辺約45cmを測る。方位はN-85°-Wである。平面形は隅丸長方形、断面形はU状を呈すると考えられる。第23号土壙墓との切合関係を明確にすることは出来なかった。遺物は検出出来なかった。

第21号土壙墓

第21号土壙墓の規模は長辺約115cm、短辺約50cm、深さ約30cmを測る。方位はN-15°-Eである。平面形は隅丸長方形、断面形はU状を呈す。層位は二層に分かれる。上層は地山ブロックを含む。底面は両側が低くなっている。遺物は検出出来なかった。

第22号土壙墓

第22号土壙墓の規模は長辺約60cm、短辺約33cmを測る。方位はN-90°-Wである。平面形は隅丸長方形、断面形はU状を呈すものと考えられる。上層を擾乱されているため明確ではない。遺物は検出出来なかった。

第23号土壙墓

第23号土壙墓は木棺墓である。掘方規模は長辺約216cm、短辺79cm、深さ59cm、木棺部は短辺50cmを測る。方位はS-11°-Wである。平面形は隅丸長方形、断面形は二段掘りを呈す。南側底部より朱が検出された。

(ウ) 西側土壙墓群(図12)

この土壙は明確なもので3基の土壙墓が切りあっている。

第24号土壙墓(図13)

第24号土壙墓は木棺墓と考えられる。規模は長辺約235cm、北側端部約80cm、南側端部約60cm、深さ約60cmを測る。方位はN-13.5°-Eである。平面形は整った隅丸矩形、断面形は二段掘りを呈す。底面はほぼ水平である。上層より「上束式」の特徴を有する土器が出土している。土器片は黒色土内でレベル的にかなりのばらつきのある出土状態を呈した。

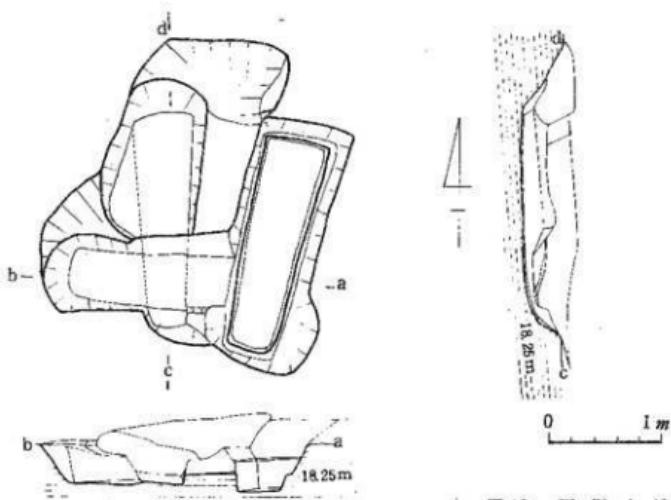


図 13 西側土塙墓群

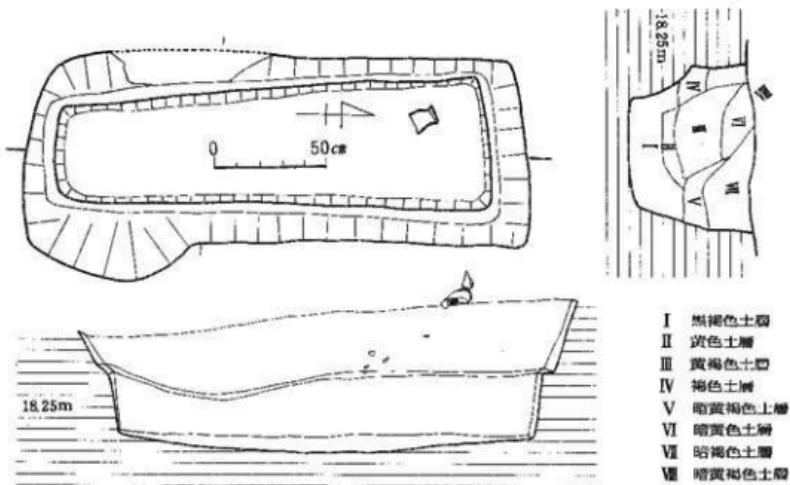


図 14 第 24 号土塙墓

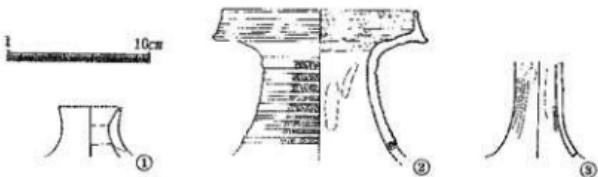


図15 第24号土壙墓・出土土器

第25号土壙墓

第25号土壙墓の規模は長辺約170cm以上、東側端部60cm、西側端部40cm、深さ40cmを測る。方位はN-87°-Wである。平面形は雑な矩形、墓壙断面はU字状を呈する。底部に暗黄灰色の粘土を施したものであった。遺物は検出出来なかった。

第26号土壙墓

第26号土壙墓の規模は長辺240cm、北側端部60cm、南側端部40cm、深さ45cmを測る。方位はN-5°-Wである。平面形は矩形、断面形は二段掘りを呈する。第25号土壙墓に切られている。遺物は検出出来なかった。

IV 章 出土遺物

長曾土壤墓群の調査によって検出された遺物は、第1号土壤墓から供献された土器片、第5号土壤墓から供献された鼓形器台、第6号土壤墓から供献された注口土器・鼓形器台・鐵石、第19号土壤墓から甕・鼓形器台・砥石・石、第24号土壤墓から蓋・高坏等である。以下各土壤墓別に記す。

第1号土壤墓（図5-1）

表土直下の土壤北側隅より高坏の坏部接合部分が出土した。風化の著しい小破片であり、接合部は直徑約3cmと考えられる。坏と脚部とは組み合わせ成形手法である。坏部がゆるく外反するものと考えられる。

第5号土壤墓（図7-1）

表土直下の土壤墓中央より鼓形器台の脚台部が出土した。脚台部は完形であった。外面は風化が著しく、16条の平行沈線が施されているが、何条の工具により施されたのか、明確にすることが出来ない。内面は脚下部から上方方向へラケズリが施こされ、脚部端部では横ナデが施こされている。脚部はゆるく外反する。脚部内面はナデが施こされている。脚端部径は17.2cmを測る。

第6号土壤墓（図8-1、2、3）

注口土器、鼓形器台と鐵石（3）が出土している。注口土器（1）は口縁径16.5cmを測り、口唇部がやや外反する。肩部最大径は肩部中央部より上にある。肩部に波状文とその下に平行沈線文が施されている。焼成は不良であり、胎土は角のある1mm大の砂を含む。注口下部に黒斑がある。

鼓形器台（2）は、受部口縁径が23cm、脚台部径が20.6cm、器高14.7cmを測る。完形の土器である。受部、脚台部とゆるやかなS字状を呈しており、土器の底部が接する部分についてはかなり広く器台として機能的な形といえる。焼成は良好で、砂を多量に含む。調整は丁重な作りである。色調は褐色を呈す。

第19号土壤墓（図11-1、2、3、4）

第19号土壤墓出土の遺物は、表土直下の墓壙上面に供献された鼓形器台2個体、甕1個体、砥石である。

甕（1）口縁部は外反し、また口縁端部は丸くなっている。口縁径は16cmを測る。肩部内面にはラケズリが施されている。肩部は二つの平行沈線文が施される。肩部最大径は肩部中央部と考えられる。卵形を呈する。焼成は良好であり、1~2mm大の角のある黒灰色の小石を含む。色調は黄褐色を呈す。肩部内面には朱が付着している。

鼓形器台（2）肩部受部の凸帯で約15cmを測る。厚い土器である。焼成は良好であり、細かな砂を多量に含む。淡黄色を呈す。出土した土器片を全て接着しても一個とはならない。

鼓形器台（3）口縁端部はやや外反する。受部口縁18.6cm、脚台部は径17.6cm、高さ14.6cm、と考えられる。脚端部口唇内面はやや肥厚する様に成形されている。焼成は良好で砂を含む。色調は黄褐色を呈す。

砥石（4）平面と側面の一面づつをよく使用している。縦7.8cm、横10cm、厚さ約3cmを測る。

第24号土壙墓（図13-1、2、3）

第24号土壙墓からは、手捏の小型壺、壺、高环が出土している。

手捏の小型壺（1）は風化が著しい。口縁は外反しており、口縁部はつまみ上げるように作ってある。焼成は良好で、砂を多量に含む。明褐色を呈す。

壺（2）は口縁径14cmを測る。口縁は内向するが、口唇はやや外反する。口縁部は凹線とは言えないが、工具によって横にナデが施されてある。頸部は時計方向へのヘラケズリを施した後、縦方向のナデを施して仕上げてある。頸部外面の凹線文は一本一本を別個に施してあり、その跡方がたがいちがいの凹線もある。口縁内部は朱が施してある。焼成は良好であり、調整は丁寧である。1mm～0.5mm大の黒褐色の小石・砂を含む。色調は暗褐色を呈し、他の土器とは趣を異にする土器であり、上東式土器の特徴を受けているものと考えられる。出土した頸部の破片の外側に炭化物が付着しているものがある。

高环（3）脚部のみが検出された。脚部は下方へゆるやかに外反するものである。脚部の接合部の状態から組合わせ形成手法と考えられる。外面はたて方向に細かなみがきが施され、内面は縦方向にヘラケズリが施されている。焼成は良好で、砂を多量に含む。色調は淡黄色を呈する。

イ 溝状造構（図10-1、2）

低脚环と鼓形器台が出土している。

低脚环（1）

环部はゆるやかに外反する。口縁端部は破片によると、三角を呈し、端部に平坦面を形成している。脚端部は丸く作られている。环部内外面はヘラミガキで調整されている。内部はハケ目が残っている。环と脚部は組合わせ形成技法によると考えられる。焼成は良く、0.5mm大の角のある小石を多量に含む。丁寧な作りである。色調は淡黄色を呈す。

鼓形器台（2）受部径は16.6cm、脚台部径は15.4cm、高さ9.2cmを測る。受け部、脚台部とも端部はやや外反する。受部内面は横方向へのヘラケズリの後ミガキが施される。脚台部は横方向へのヘラケズリのみである。風化が著しい。1mm大の角のある小石を含む。色調は淡黄色を呈する。

ロ 溝状造構（図10-3）

低脚环が出土している。風化が著しく、調整は不明確である。环部はゆるやかに内湾している。砂を多量に含む。色調は黄褐色を呈す。

V章 まとめ

台状墓^①

東側土塙墓群は台状墓とその周辺に所在する土塙墓群と考えられる。

特に西側斜面部には貼石と考えられる石列が確認された。

台状部には第4号土塙墓を除くと長軸方向においてほぼ2つの土塙墓群を認めることができる。

同様なものとして安来市沢町鍵尾遺跡が考えられる。^②

周溝墓

中央土塙墓群を区画しているイ・ロ溝状造構は他の土塙墓より著しく浅く、出土した土器も底部で検出されたものもあるため溝として考えるべきであろう。

この様な溝に区画されている中央土塙墓群は周溝墓と考えたい。

イ・ロ溝状造構のように坪・器台が出土した周溝墓の周溝には青木遺跡HSX10(低脚坪・鼓形器台)HSX12(低脚坪)・HSX13(器台)がある。^③

副葬品

土塙墓内から副葬品は検出出来なかった。

置石について

長曾土塙墓群において第6, 19号土塙墓の墓壇上面より石が出土した。そしてこの石については以前より指摘され、島根県においては安来市九重第三土塙墓^④同小谷土塙墓^⑤同鍵尾第一号土塙墓群^⑥同安養寺第一号墳第一号墓^⑦同中山第Ⅱ土塙墓^⑧東出雲町大木権現山1号墳1号土塙^⑨松江市塙土塙墓^⑩邑智郡石見町中山B地区墳墓群^⑪が報告されている。

この石は「墓標」^⑫・「標石」^⑬と考えられているが、その表面に削痕があるものがあり、また長曾第6号土塙墓のように盛り土と考えられる土の下より出土する場合や、同第19号土塙墓では土器の上に割石を乗せている場合があるため、ここにおいては置石と称することにする。

そして、これは「土塙墓群」の中心主体と考えられる一つの土塙墓からしか出土しない可能性があり、このことから家長の埋葬に伴うものと考えられる。

若干の考察

長曾土塙墓群は無区画の西側土塙墓群・台状墓第5号土塙墓→台状墓内第6号土塙墓→周溝墓と時期を追って造られたものと考えられる。またこの土塙墓群の両側に古墳が所在しており、これら土塙墓群との関連が問われるところである。また、同丘陵下は剝離遺跡でありこの土塙墓群

造宮の集落の可能性がある。

長曾土壙墓群が造られた時期は飯梨川西側においては「仲仙寺8・9・10号墳」、「安養寺1・3号墳」、「宮山4号墳」のような四隅突出型方形墳墓が築造されていたと考えられる。

これらの墳墓と長曾土壙墓群等の飯梨川東側に所在する土壙墓群について、これらを地域的な差異と考えなければ、この時期この地域においては「特定の葬送概念の下に入びとがその社会的位置を墳墓のなかに表現した時代」の到来を意味するものとも考えられる。それは四隅突出型方形墳墓についての、区画列石による方形の四隅を突出させた土地占有形態、主体部の砂による埋納形式、若干の副葬品を有すること等から指摘出来る。

しかし、これらは土壙墓の在り方を発展させたものと考えられる。その占有地内においても、「宮山4号墳」を除けば、家族墓的であり、「安養寺1号墳」では中心主体と考えられる1号墓壙において土壙墓同様置石が出土している。

のことより、安来平野の古墳出現直前の墓制について、置石や土器が出土する土壙墓が家長のものと仮定すれば、四隅突出型方形墳墓（首長墓）においても葬送儀礼においては首長家族の家長祭祀を出るものでなかったと考えたい。

長曾土壙墓群はその様な弥生時代社会の所産であったと考えられる。

[註]

- ① 三方の区画しか認められないが合状墓とした。
- ② 『さんいん古代史の周辺(中)』P 143
- ③ 『青木遺跡発掘調査報告書』1978年
- ④ 内田才、近藤正、東森市良、「島根県安来市平野における土壙墓」『上代文化』第36輯 1966年 P 14
- ⑤ ④と同じ P 19
- ⑥ ④と同じ P 19
- ⑦ 勝部昭 「安養寺古墳群」『安来市の遺跡調査報告 第一集』安来市教育委員会 P 35
- ⑧ 内田才 「安来・中山遺跡」「島根県埋蔵文化財調査報告書第Ⅳ集」 1972年 P 3
- ⑨ 『大木觀現山古墳群』東出雲町教育委員会 1978年 P 10
- ⑩ 近藤正、前島己基 「島根県松江市の中塚土壙墓」『考古学雑誌』57巻4号 1972年 P 39
- ⑪ ②と同じ P 224
- ⑫ ⑩と同じ
- ⑬ ⑦と同じ
- ⑭ 近藤義郎 「古墳とはなにか」『日本の考古学Ⅳ』1965年 P 7



遠景（調査前）



近景（調査前）



近景 (調査後)

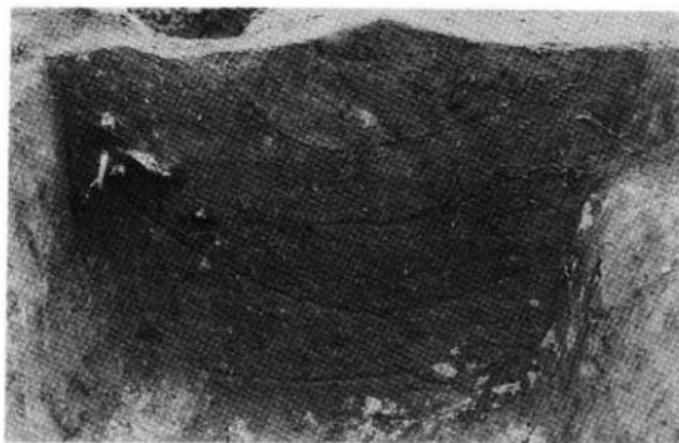
東側土壙墓群・中央土壙墓群

図版 3



近景（西側土壤基群）

図 版 4

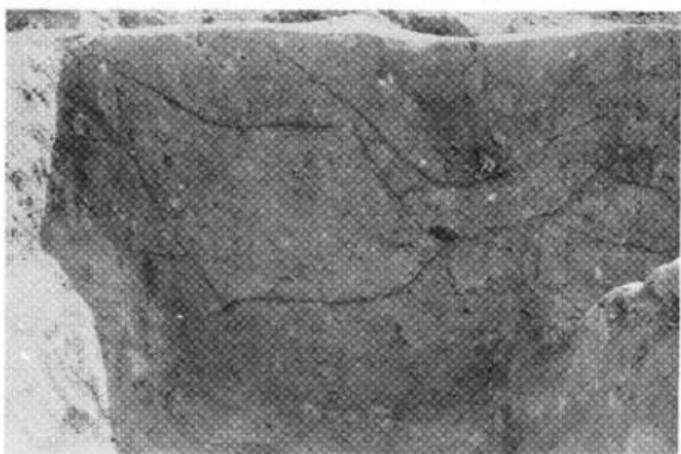


第 5 号 土 壤 墓 土 层 断 面 図



第 23 号 土 壤 墓 土 层 断 面 図

図版 5



第 24 号 土壌 墓土 層断面図



イ 滉 状 造 構

圖 版 6



列 石 状 遺 構 1

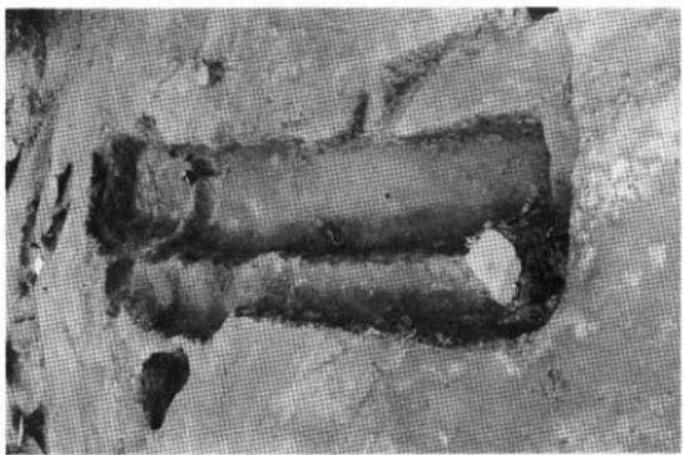


列 石 状 遺 構 2

图版 7



第2号、第3号土壤侵蚀状况



第3号土壤侵蚀

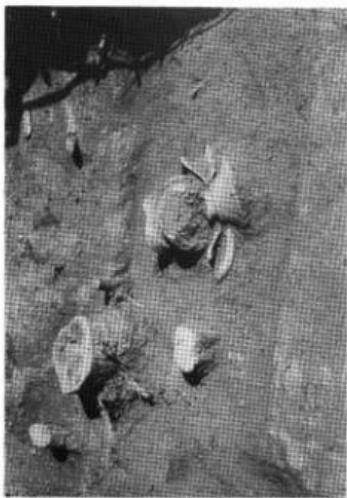
図 版 8



第 2 号 土 墓



第 13 号 土 墓



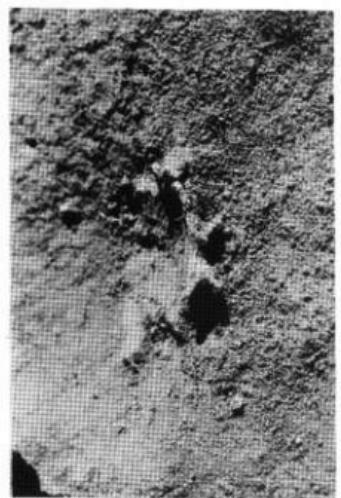
第 6 号土坑墓出土状况



第 19 号土坑墓出土状况

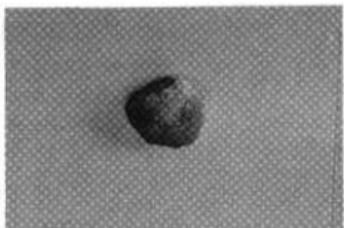


第 19 号土坑墓出土状况



第 19 号土坑墓出土状况

図版 10



5-1



7-1



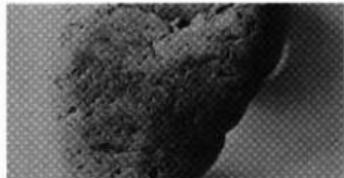
8-1, 2



8-2



8-3



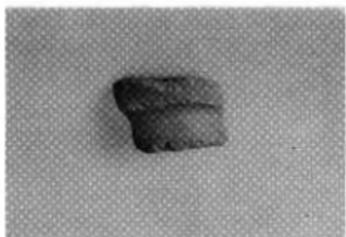
8-3

出土 遺物

圖版 11



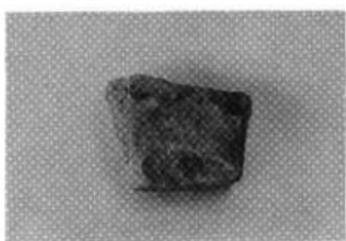
12 - 1



12 - 2



12 - 3



12 - 4



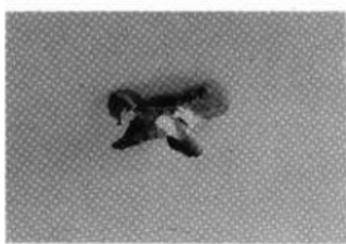
10 - 1



10 - 2



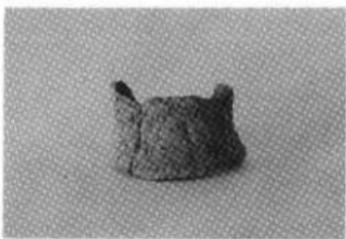
15 - 3



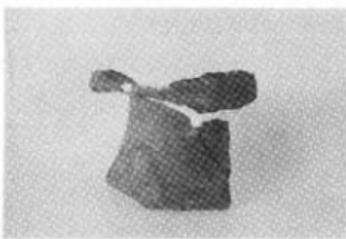
10 - 3

出 土 遺 物

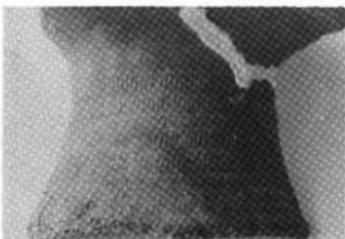
図版 12



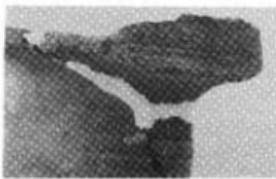
15 - 1



15 - 2



15 - 2



15 - 2

出土遺物